竹山研究室　― オブジェ・アイコン・モニュメント ―

Takeyama Laboratory - Objet d'Art / Icon / Monument -

かつてアドルフ・ロースは「真の建築は墓とモニュメントのうちにしかない」と書いた。ネアンデルタール人が死者に花を手向け、現生人類が音の出る楽器を作り、洞窟に絵を描いた時から、人間は空間に目覚め、過去と現在と未来の概念を知り、共同体の結束を意識した。やがて身体を超えるスケールを持つ建築という空間芸術の力を磨き上げるようになった。都市が築かれ、都市の要には常に建築があった。建築という行為の根元には記憶を刻み込むという営為がある。時間と空間を畳み込むという思考がある。建築の有する力を再確認し、その上でこの力を強め、歪め、弱め、消し、きらめかせ、輝かせ、・・・そうした空間加工のイメージをのびのびと広げていきたい。

2019 年度竹山スタジオコースでは、「オブジェ・アイコン・モニュメント」という言葉をきっかけとして、世界観に一石を投じるような建築をつくることを目指し、竹山教授、小見山助教授、竹山スタジオに参加する 9 人の学生でディスカッションを重ねた。

「オブジェ・モニュメント・アイコン」やそこから派生する概念を分析し解釈することで生まれた、都市や建築に対する各々の問題意識を共有し議論したのち、京都の 15 km 四方のエリアを 9 分割し、それぞれ 5km 四方の区画を無作為に割り当て課題を進めていくこととした。その区画の中から「オブジェ・アイコン・モニュメント」に関わる事象を取り出し、各自の問題意識と照らし合わせる中で、空間加工における新しいイメージを見つけ出していく。

オブジェ・アイコン・モニュメントにまつわる言葉たち

「オブジェ・アイコン・モニュメント」およびその派生概念を分析し解釈することでうまれた都市や建築に対する各々の問題意識を学生間のゼミを通して共有し、議論した。以下を読書会で扱った：

■『にもかかわらず』(アドルフ・ロース)

課題文内の「真の建築は墓とモニュメントのうちにしかない」は本著から引用されている。ロースは手段そのものであった装飾が目的化している問題と並行して、建築家の役割が手段としての図面を引くことから、美しい図面をみせることに変わることで、その先がない中身のないものをつくる存在になってしまっていることにロースは危機感を示している。ここで社会背景による合意形成のもとで作られたもの、即ちポリティカルコレクトネスに沿った建築では、プロセスが目的化されてしまっているのではないかという観点が議論によって引き出された。

■『S・M・L・XL』(レム・コールハース)

本著の「ビッグネス」の章でレム・コールハースは、建築のスケールがある閾値をこえた瞬間に獲得するモニュメント性について言及している。また、内部と外部、またその境界について大きな示唆を与えてくれるものであった。

■『もの派』

建築を軸にした議論だけでなく、戦後の芸術運動の「もの派」も注目した。特に李禹煥と菅木志雄を扱った文章を読み、オブジェ同士の関係性と観測者の立ち位置について考えることで、単に輪郭をもつ物体がオブジェ性・アイコン性・モニュメント性を形作っているのではなく、それを捉える観測者の関係性も重要な要素であることを確認した。

以上の議論を元に、スタジオのテーマについての思考の枠組みを組み立て、作品に落とし込むことに移って行った。

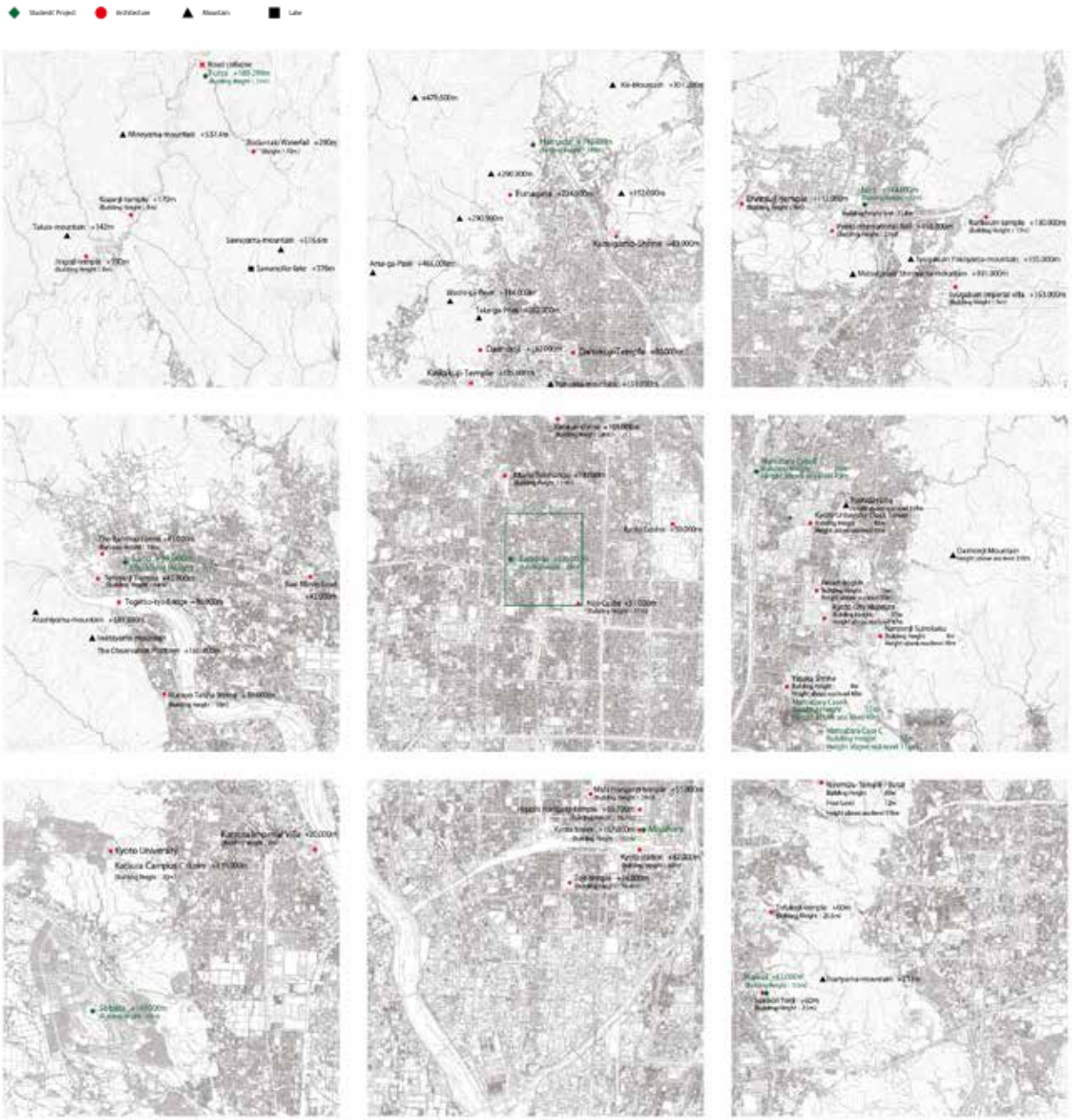
課題設定について

京都の 15 km 四方のエリアを 9 分割し、それぞれ 5 km 四方の敷地を無作為に割り当てた。 学生は割り当てられたそれぞれの敷地の中で「オブジェ・アイコン・モニュメント」についての議論から結論づけられた問題意識と照らし合わせ、空間加工における新しいイメージを構想していった。

京都には、多くのオブジェ・アイコン・モニュメントが点在している。以下は今回のスタジオで扱った敷地とそれぞれのブロックに分布している京都のオブジェ・アイコン・モニュメント性を持つ文化財、伝統建築物、ランドマーク、自然景観をプロッティングしたマップである。

北山杉が大いに存在感を発揮する北西部または比叡山が聳え立つ北東部をはじめとした山々が特徴的なのは北側、かつての御土居があり祇園、平安神宮、京都御所などの観光地に加え京都の伝統的な街並みが並ぶのが中心部である。そして南部には洛西ニュータウン、京都駅および京都タワー、伏見稲荷などがあり、全体を見渡せばそれぞれの区画でオブジェ・アイコン・モニュメントが異なる密度で分布している。

これらの場所の特異点となるであろうものが果たしてオブジェ、アイコン、モニュメントのどれに該当するのか、またはしないのかについては学生がそれぞれ異なる見解を持ち、作品に色濃く反映されたといえよう。

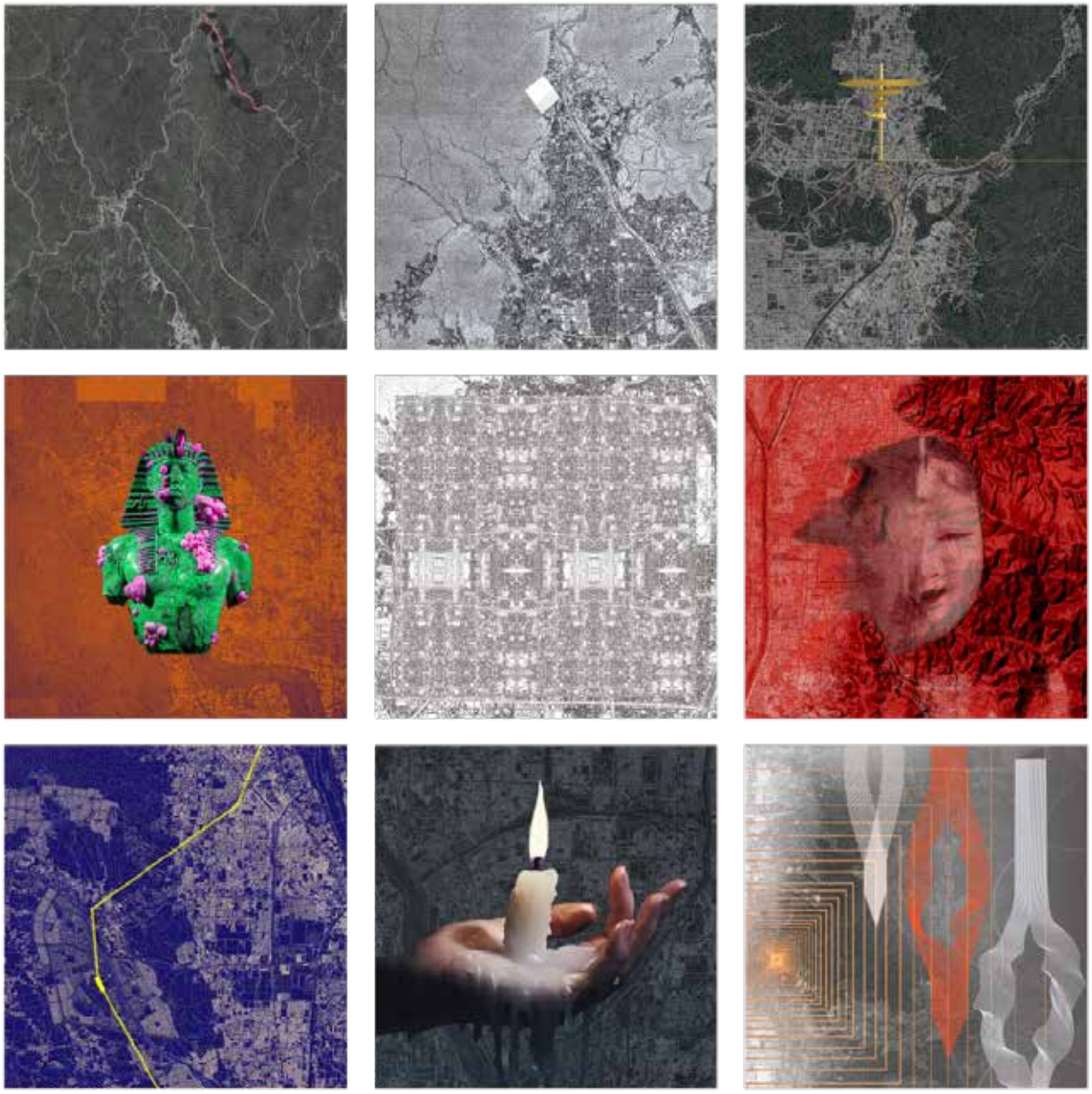


本スタジオの敷地および各エリアに点在する主要建築物・自然景観等のプロッティング

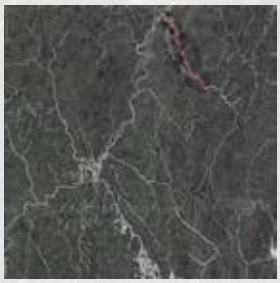
オブジェ・アイコン・モニュメント分析

竹山教授・小見山助教を交えた研究室ゼミならびに研究室学生有志で開催した読書会でオブジェ・アイコン・モニュメントの定義の仕方、そしていかに空間加工のイメージにつなげるのかなどについて繰り返し議論を行なった。以上の議論を踏まえ、９名の学生はそれぞれオブジェ・アイコン・モニュメントについての見解を深め、この３つの言葉についての仮説的な定義を行なった。

オブジェ・アイコン・モニュメントについて言葉で記述することに止まらず、学生たちはそれぞれに割り当てられた敷地にて観察した建築物、土木構築物、自然景観などの事象やオブジェ・アイコン・モニュメントの定義および三者から派生する空間加工のイメージをもとにビジュアライゼーションを行い、以下のようなコンセプト･アイコンを制作した。アイコン･マップからもわかるように、各々が持った空間加工のイメージならびに９つの対象敷地のそれぞれは異なる性格を持っている。



各自の敷地のイメージおよびオブジェ・アイコン・モニュメントの定義に基づいて制作したアイコン



時間のモニュメント

オブジェ・アイコン・モニュメントは
その表皮によってのみ判断されており、
視覚に大きく依存している
建築の内部から OIM 性を考えることはできないか

時間のズレによって生じる変化を
光、音、風、匂いなどの変化に変換し
それらを内部空間に充満させる
そこを歩くことで、空間の変化を体験し
時間の流れを知覚することができる装置を考えた。

“ICON” is just like a MAGNET.

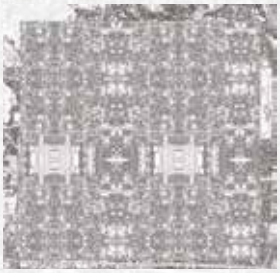
建築は長いこと人間を魅了してきました。
人々やさまざまな行為を強力に惹きつけ、
常に新たな文脈を創り出してきました。

それはつまり、
“ アイコンである ”
ということです。

コミュニケーション・モデル

建築における自己モニュメント

モニュメントが表象する「時」や「出来事」は具体的であり、
その価値観を 定める文化や政治が変化すれば、必然的にモニュメントは失われてしまいます。それならば、「失われないモニュメント」
は存在しないのか？これが、今回 私が定めた疑問です。
…
自己モニュメントの本質は自ら (能動的に) 生命を持ち始める点にあるのではなく、「構築」なる無機的行為と「生命の付与」なる有機的行為 という、一見矛盾する行為が同じものに対して行われ、
その有様が顕在化し ているという点にあると考えるのです。
…
建築における自己モニュメントとは、
一体どんな様相を成しているのでしょうか？



鏡の結界

聖域にとって、
自らの世界が全てである。
俗域にとって、
聖域は認識できず、無いものとなる。

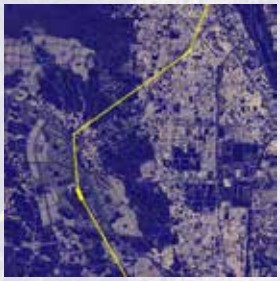
しかし鏡の結界が歪んだり欠損したとき、
鏡はそれ自体の存在感を放ち、
向こう側の世界を垣間見させ、
結界を越えさせる。

「ものそのもの」

オブジェ・アイコン・モニュメントは
物体に相対する人間の命名行為の産物である。
彼らは自らのイメージを物体に投影させようと試みる。

O・I・M はオブジェクトであることで同根である。
オブジェクトは寡言かつ雄弁である。オブジェクトは無宰だ。
文化的・社会的・時代的な文脈の複雑さにより、
投影されるイメージは常に揺れ動き不確定性に満ちている。
したがって「それは何であるか」という命名という試みは
もはや全く意味のなさないものではないだろうかと疑う。

あなたは果たして「それ」を「それ」として見れているのだろうか。
その「仮面」の裏側を暴いてみせよう。



未来モニュメント

モニュメントは流れている時間を区切り、ある特定の歴史や出来事などを可視化する装置である。未来の時間を区切り未来の出来事を
可視化するモニュメントを「未来モニュメント」とする。

このモニュメントはその先に迫る未来によって性質を変える。
未来モニュメントが示す未来が実現した場合、モニュメントから現実物に「昇華」する；大きな発展がもたらされたとき、その軌跡を
示すモニュメントへと「飛躍」する；未来が実現しない場合、
半永久的に未来モニュメントとして「凍結」するだろう。
いずれかが示した未来そのものが想像できなくなってしまう場合、
未来モニュメントとしての力を失い「瓦解」するだろう

時間とともに変容する未来モニュメントの可能性を探った。

アイコンの成熟

“ アイコン ” とは “ 成る ” ものだ。アイコンは時間をかけて形成されるものなのだ。これをアイコン的熟成と呼ぶことにする。
このアイコン的熟成の過程で建築には資産的価値が宿ってゆく。
しかし単に時間の経過がアイコン的熟成を進めるわけではない。

誰の目にも留まらないような潜在的あるいは普遍的なものは
アイコンにならない。そのものがアイコンに成るかどうかには、
人にどのくらい注意深く見られ、記憶されたかが大切なのだ。

アイコンとは、知覚・認知されることによって
その場所の一面として成熟し、歴史を必ずしも反映しない。
アイコンは場所の過去を象徴するのではなく、
その未来の特性を方向づける指針となるものである。

決定要因

モニュメントとオブジェはいずれも自立的であり、
意味性の有無という観点から
同一線上に整理できるが、
アイコンはそれらとはパラレルな立ち位置であり、
アイコンであるモニュメント・
アイコンでもあるオブジェがありえる。

モニュメントとアイコンはその形状だけで
決定されるのではなく、空間や風景、記憶によって
人々に認知される。

00 CONCEPT MAP

01. 太井　康喜
TIME IN KITAYAMA

02. 斎藤　風結
自己礼賛

03. 瀬端　優人
未来構想

04. 濱田　叶帆
Among the Air

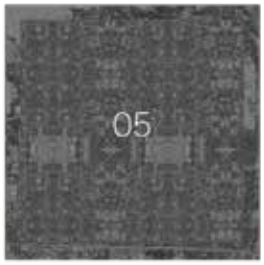
05. 谷重　飛洋子
あちらとこちらと向こう側

06. 宮原　陸
Melting Kyoto Tower

07. 石井　一貴
岩倉の道しるべ

08. 松原　元実
(Ir-)Rational -Sculptural Experimentations-

09. 河合　容子
Outside / Inside / Missing



01 Time in Kitayama

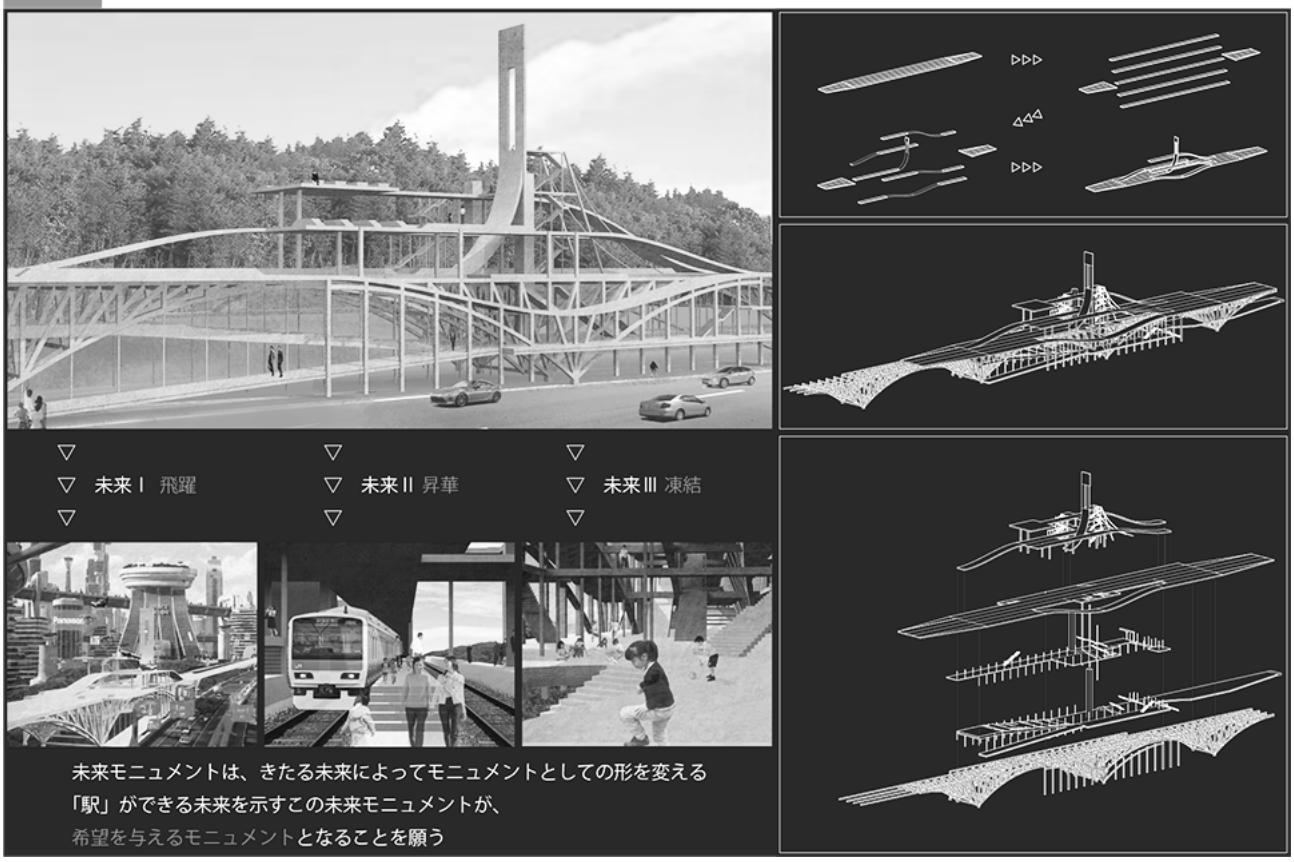
太井 康喜

02 自己礼賛

齊藤 風結

03 未来構想

瀬端 優人

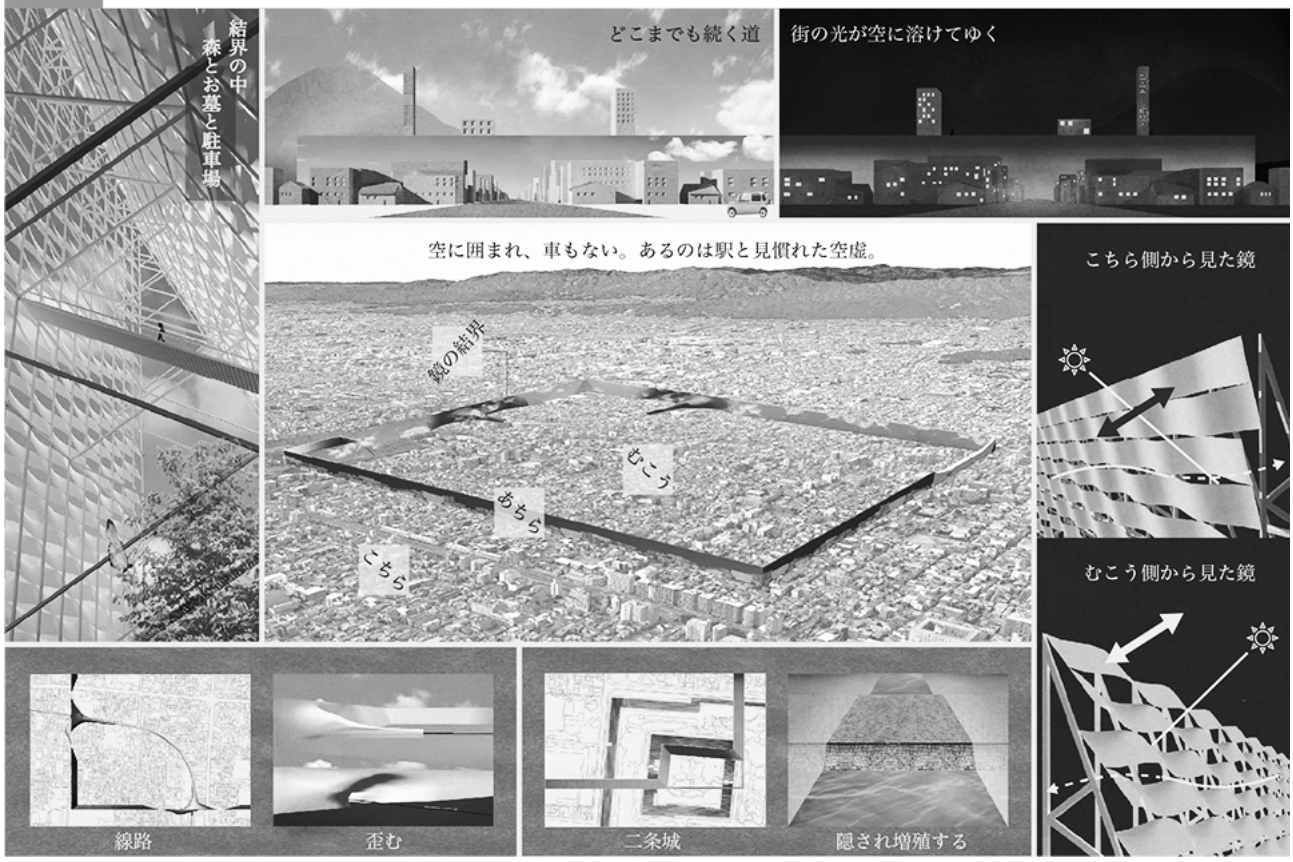


04 Among the Air

濱田 叶帆

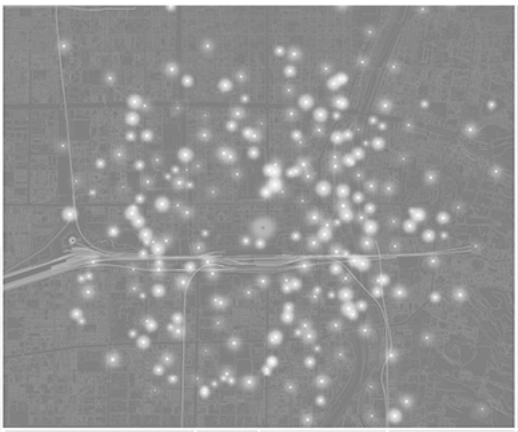
05 あちらとこちらと向こう側

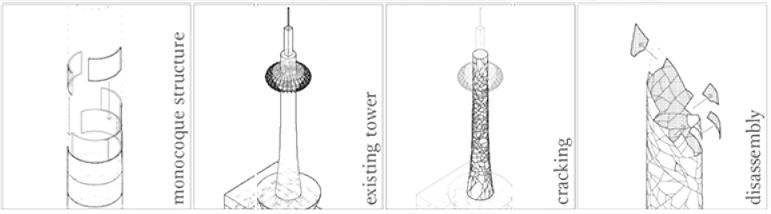
谷重 飛洋子



06 Melting Kyoto Tower

宮原 陸





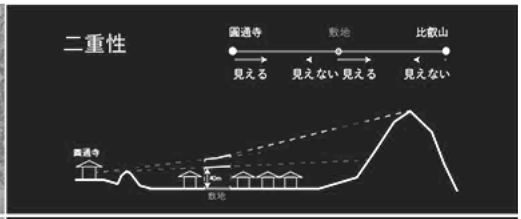
京都タワーの解体

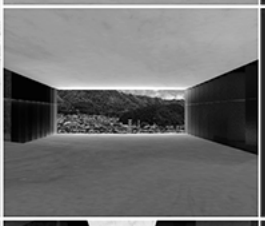
「お灯明」を溶解させて作り出す新しい景観

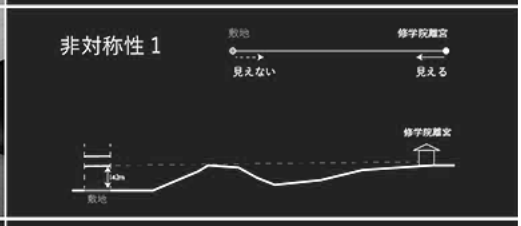
街のアイコンが解体された時、そこに宿っていた記憶と愛着はどこへゆくだろうか。
アイコンの欠片を街に提供し、再利用を促すことで、そのアイコン的な価値が人々の手で街に留められてゆく。景観を意図的にを作ろうとする街のブランド化を肯定的に捉え、建築の終わりと記憶を街に投影することで、都市に建築の存在を積み重ねてゆくことはできないだろうか。

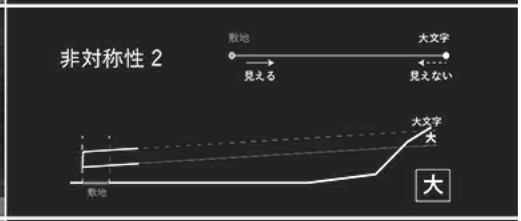
07 岩倉の道しるべ

石井 一貴

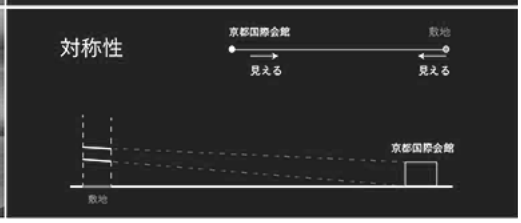






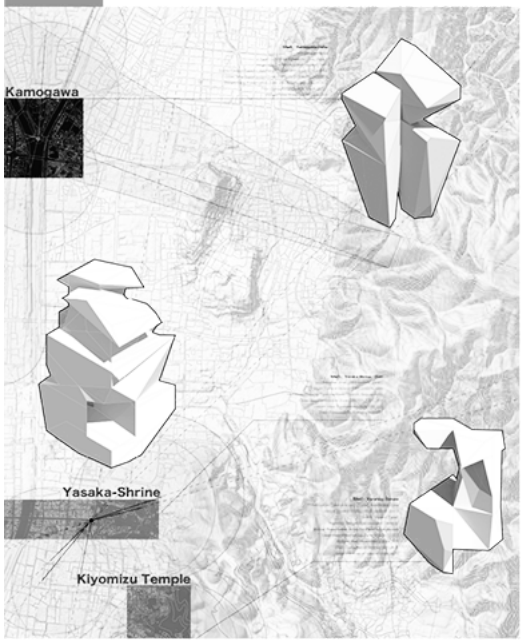


道しるべは、周りにあるオブジェ・アイコン・モニュメントの存在を示唆する。それを見た人は、それぞれの関係性を捉えることができ、全体への視座を獲得する。
京都の岩倉において、この地域にある様々なオブジェ・アイコン・モニュメントの存在とその関係性の中に、様々な形で身を置けるような建築を考えた。



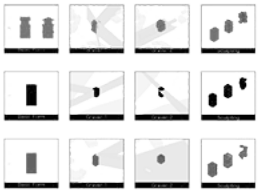
08 (Ir-)Rational - Three Sculptural Experimentations -

松原 元実



DIAGRAM

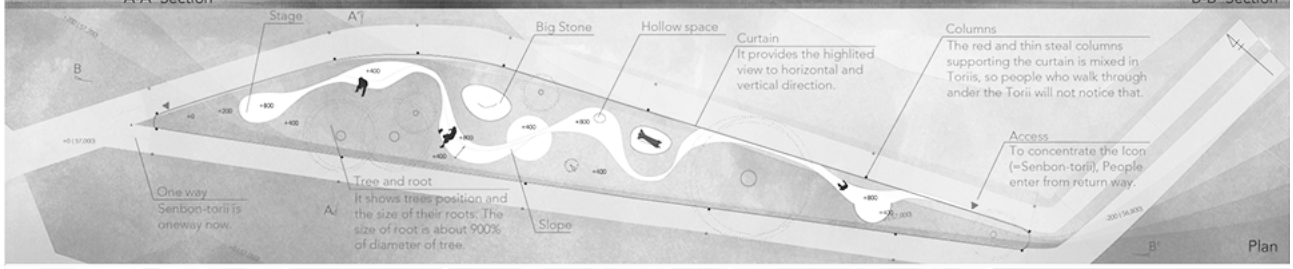
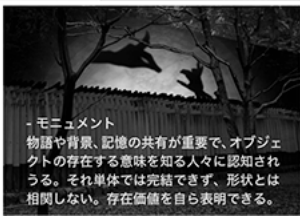
Decide the basic form according to the regulation of utility zone. Cut and shape the scupture refering to the scenic zone and the view point. Concequently, the irrational form is generated, based on the series of sculpting.



京都の景色に違和感を感じる。観光客はアイコンとして観光資源を消費し、そのものを果たして見ていない。合理化された「調和」を目指し記号化された「京都らしさ」、景観条例はその状況を作りだすことに加担している。ならば…。膿を炙り出すように、合理化の権化である条例を彫刻刀と見立て、歪な彫刻を掘り出せるのではないか。この彫像、またはオブジェクトは只々無言に、かつ雄弁に、消費され尽くされた京都の各地点に鎮座し、禍々しくかつ粗々しい「モノらしい」悪臭を漂わせる。

09 Outside / Inside / Missing

河合 容子

千本鳥居はモニュメント性を失いかけ、京都のアイコンとして認知されている。その由来は重要ではなく、朱色の鳥居が連続する空間に人々は惹きつけられているのだ。しかしオブジェではない。それは外的視点を有していないからである。外的視点を獲得したとき、伏見稲荷の千本鳥居はモニュメントであり、アイコンであり、そしてオブジェでもある存在になるのではないだろうか。

千本鳥居の水平性と、外界からの乖離性を強調する幕を鳥居に沿って架けることで、その内部に外的視点を持ち込み、千本鳥居のオブジェ化を試みた。